
勇者が前世な女剣士

JIGEN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者が前世な女剣士

【Nコード】

N0040M

【作者名】

JIGEN

【あらすじ】

魔王と死闘を繰り広げた末、やっとこさ勝利を手にした勇者ユルカ。しかし、魔王を倒した事で魔界は崩壊。ただ一人、世界を救う為の犠牲となった。

突然ながらエピソード

「あーあ、畜生め……。こんな終わり方ありかよ……」

単身で魔界に特攻し、見事魔王を撃破した所までは良かった。

だがここは魔王が作った亜空間『魔界』。魔王が死ねば、魔界も消える。

魔界が消える事とはつまり、一つの世界が消えるという事。

世界が消える事とはつまり、そこに存在する全てが無に返されるといふ事。

よって俺は今、人生最大のピンチに陥っている。

超巨大な魔獣と対面した時や、お城のお姫様（四十代）と結婚させられそうになった時よりもヤバイ。

無に返されるって事はつまり、塵も残らないって事だ。

これじゃあ誰が俺の骨を拾ってくれるのかねえ…？

……確かに、魔界が完全に消え去るまで、あと少しだが猶予がある。

しかし空間転移の門は、この魔王城から数キロ以上離れた先にある。

そんな距離をどうやれば物の数分で縮められるのだろうか。

仮の話だが、魔王と死闘を繰り広げる前の万全の状態なら、或いはギリギリ間に合っていたかもしれない。

だが残念な事に、俺は魔王との戦いで散々に疲弊しきっている。しかも体はボロボロ。

こんな出血ドバドバ状態で全力疾走なんてしたら、それこそこの魔界が崩壊する前にポツクリ逝っちまうだろう。

結果、俺はこの魔王城の最上階で仰向けに寝転がって、これ以上出血が酷くならないように、なるべく長く延命する為に、無駄な努力を行使する。

助けは来ない。断言できる、助けは来ない。

魔王と戦ってる最中、ようやくあの王様の思惑に気づいた。

あのクソ爺は勇者（俺）と、そこに転がってる魔王との相打ちを狙っていたのだろう。

聖剣の力は膨大だ。使い手によっては聖なる剣にも破壊の剣にもなれる。

客観的に見ればさぞ恐ろしい凶器だっただろうな。

そんな凶器を振り回せる勇者は、見方によれば魔王と同じに見えていたのかもしれない…。

そして、魔王を倒した勇者はそれ以上の脅威になり得る。

今頃あの愚王は民を集めて、いかに勇者が危険であるかを説いているのだろう。

・・・理不尽だと思う。

俺は今まで、誰かを傷つける為にこの力を振るったか？

俺は今まで破壊の為、私欲の為にこの力を振るったか？

答えは否。俺はいつだって誰かを守る為に戦ってきたつもりだ。

一度だって聖剣を悪行に使おうなどと考えた事はないのに。

それに魔物や魔獣相手に一人命張って、今の今まで戦い続けてきたのに、この仕打ちは流石に酷いと思う。

仰向けから体を大の字に変え、亀裂の入った天井から零れる光を見上げる。

・・・俺も元々は、そこら辺に転がっている村人Aと大差ない存在だったんだ。

だからあの時、あの祠で、この右手に握っている聖剣（相棒）に出会わなければ、こんな結末にはならなかったのかもしれない。

後悔していないと言えば嘘になる。

勇者だからと潔く死に切れる訳もない。

だって、そうだろう。

俺まだ18だもん。

人生これからだぜ。

まだまだやりたい事だって、たくさんある。

結婚だってしたい。

子供だって欲しい。

家庭を築いてみたかった。

こんな所で死にたくない。

こんな所で終わりたくない。

どうせ死ぬなら孫の顔が見たい。

.....。

あと数秒もすれば、この世界は無に返るだろう。

こんな終わり方嫌だけど、こんな死に方ご免だけど、泣いても仕方

ないんだ。

軋む体を無理やり起こし、聖剣を空に向けて掲げる。

・・・地響きが激しい。

恐らく、魔界の意思が最後の足掻きを見せているんだろう。

ならば、俺も一緒になって、最後の足掻きを見せてやるっじゃないか。

「俺の名はユルカ」

地響きが段々と弱くなっていくのが分かる。

魔界の命が尽きていくのが分かる。

「元農民で」

空が、空間が、紙を切るように引き裂かれていく。

「元一般人だけど、今は」

ぶっちゃけ、一度も誇りに思えた試しなんてないんだけどさ。それでも…

「今は、誇り高き勇者だ」

世界が白黒の世界へ移り変わっていく。

もう一刻の猶予もないのだろう。

地響きも止んだ。

空も真っ白。

これで、終わりか。

勇者ユルカは魔王と相打って世界を救った。

めでたしめでたし、ってか。

ああ、そうだ。

終わりの前に相棒に別れを告げなきゃな。

空に翳している相棒に向かって、言葉を紡ぐ。

「お前に会ってからロクな目に会った試しがないけれど」

体が白黒へ変化していく

「それでも」

聖剣の光が消えていく

「楽しかったよ」

下半身が塵となり、もう時間なのだと悟る。

「じゃあな、相棒」

胴体も消え、残すは手と顔のみ。

「願わくば、来世ではお前と会わない事を祈る」

最後の最後で嫌味を言い放ち、相棒との別れを告げた。

この瞬間、ユルカという、勇者という存在はこの世から消え去った。

残ったのは、白の世界の中でポツリと残された聖剣のみ。

だが、ここで不可解な事が起こった。

剣の形をしていた聖剣が人の形に変わり、女性の裸体に姿を変えた。

無表情の顔からは何の感情も読み取れず、見据えるのは先ほどまで彼が立っていた場所。

「つまらない」

そう、感情の籠っていない声色で、彼女は呟いた。

「こんな終わり方は……つまらない」

聖剣が作るプロローグ

「つまらない」

こんなつまらない死なせ方を我が主にして欲しくない。

そんな感情が、この一言には込められていた。

彼女は生まれながらに『魔を滅する剣』として創生された。

だが、その力が膨大すぎるが故に、誰もが寄り付かない祠に封印される事となった。

その心境を例えるなら、生まれてから間もない赤子を暗闇の中に閉じ込めておく事と同じ行為だった。

故に彼女は人間を嫌った。

自分と言う兵器を作っておきながら、手に負えなくなったので封印した無責任な人間を。

それは赤子を捨てる事と同義。

故に彼女は人間を嫌っていた。

そう、彼に会うまでは。

彼は成り行きで彼女を手に取り、その場に起こったトラブルを解決する為に、その力を振るった。

それがきっかけとなり、彼は農民からはれて勇者に転職。

魔物を退治しながらあちこちに飛び回り、世界を見て回った。

何百年と言う月日を闇の中で過ごしていた聖剣にとって、それは夢のような日々だった。

ある時は山を登り、ある時は海を渡り、ある時は魔物を滅し、ある時は人を助け。

厳しいが、それでも価値のある時間を、ユルカという少年と共に過ごした。

それは聖剣にとって、何よりも大事な思い出となった。

だが、そんな夢のような日々も、いつかは終わりを告げる事となる。

何故か？

それは、聖剣と勇者を結び付けているのは、魔王という存在だけだからだ。

聖剣は魔物を倒す為だけに作られた武器。

勇者は魔王を倒す為だけに存在する剣士。

故に魔王を倒せば、この一時も終わりを告げてしまう。

それでも、ユルカという少年から、聖剣という名の自分。

そして、勇者という名の柵を断ち切るには魔王を倒し、この旅を終わらせなくてはならない。

幼いにも関わらず、人並みの幸せも感じられず、ただ淡々と魔物を切り刻んでいく日々。

そんな日々から少年を解き放つには、この旅を終わらせなくてはならない。

それと同時に、自分の存在意義を終わらせなくてはならない。

そう、言葉は交わせなくとも、勇者と聖剣は心で繋がっていた。

お互いが、お互いの旅を終わらせる為に、お互いの為に戦ってきたのだ。

そして最終章、最終幕、最終決戦。

最後の敵である魔王との戦いに、激戦の末、なんとか勝利を掴み取った。

これで、勇者と聖剣を繋ぐ物はなくなる。

これで、あの夢のような一時も終わりを告げる。

けれど、これで少年は晴れて自由になれる。

寂しくも嬉しい。

そんな複雑な思いを、彼女は抱いていた。

彼女の本心は『終わらせたくない』のであろう。

今までの夢のような日々をずっと続けたいとさえ思っているだろう。

だが、いつかは終わりがくる事を、彼女は誰よりも理解していた。

だから、せめていい終わらせ方をしようと、彼女は考えていた。

そして最後であろう目的を達成し、ようやく自由を手にする筈だった勇者。

これで晴れて勇者は自由を手に入れ、ハッピーエンドを迎えていたはずだった。

なのに、魔王を倒したのも束の間、突然の終わりが襲ってきた。

実につまらない最終章。

最高につまらない終わり方を、勇者と聖剣は得た。

こんなつまらない終わり方があるか。

こんなつまらない終わり方の為に、少年と私は戦い続けてきたのか。

崩壊する世界の中で、主である少年がこんな事を言い放った。

「願わくば、来世ではお前と会わない事を祈る」

来世・・・？

そうか、その手があった。

目の前で我が主君である勇者ユリカは悔いの無い微笑みの後、塵となり消え果た。

こんなふざけた終わり方に、主の人生は終わらされるのか。

こんな誰もいない世界で消え果ていくのか。

そんなの、私が許さない。絶対に、許すものか。

この聖剣の名にかけて、来世に命を繋ごう。

私の終わりはここだけど、私の墓はここだけど、

私は一緒にいけないけれど、貴方を一人ではいかせたくないけれど、それでも、貴方にこんなつまらない終わり方をさせたくないから。

だから、本当の終わりは、『新しい貴方』が切り開いて欲しい。

白い世界で一層強く光を醸し出す聖剣。

聖剣の持ち得る全ての力を、ユルカという未だここにいる魂に向けて放った。

その力は、どこか遠い遠い世界で貴方の魂を繋ぐだろう。

でも、それでいいんだ。

こんなつまらない死なせ方を貴方にさせる、こんなつまらない世界など、貴方には必要ない。

貴方には新しい世界で、未知の世界で、新しい人生を送って欲しい。

どうか次は、勇者などという柵に囚われなくて、自由に生きて欲しい。

私と言う、聖剣という呪縛にも囚われず、自由に生きて欲しい。

そして私の分まで、自由に生きて欲しい。

それが私にとっての、最大の祝福ですから・・・

この瞬間、勇者ユルカは本当の意味でこの世界から消えた。

魂から無へ葬られた肉片と血の一滴まで。

そして同時に、聖剣から放たれる光が完全に途絶えた。

残ったのは、色を無くした刀剣が一本。

地に突き刺さったまま、真っ白な世界の中ポツリと残されただけ。

だがその姿は誇らしく、それが何百年と生きた聖剣という武器の生き様だった。

たとえ色を無くしても、たとえ意思を無くしても、確かにここに存在したと、周りに訴えかけるように。

この事実をユルカが知る事は、永遠にないだろう。

流されるがままに

体が動かない。視界も映らない。

まさに流されるがまま、どこかへ導かれている。

何かに誘われるように、何かに突き動かされるように、どこか知らない場所へ流れていく。

視界が映らない以上、ここが天国なのか地獄なのか、そんな事分かる訳もない。

いや、たとえ見えていたとしても、それを認識理解できるかはまた別の話。

そんな未知の空間を何かに誘われる（いざなわれる）ように流されていく。

俺はてつきり、無に返されるって事は『跡形もなく消える』って事なんだと思っていたんだ。

いや、そう教え込まれたんだ。

だが、現実はず違った……。

死ぬという事は天国か地獄へ行く事を言う。

つまり未だ魂の転生の機会があるという事。

無へ返されるって事はもう二度とこの世界へは戻って来れない事を言う。

簡単に言えば『消される』って事だ。

それ以上の解釈を、俺は知らない。

そして俺は確かに世界の崩壊に巻き込まれ、無の世界へ返された。

俺は間違いなく無へ返された。

思考から記憶と肉体に至る俺の全てを無に返された。

その筈なのに・・・何故俺は今、意志を、思考をもっている???

無へ葬られるってのはこういう事を言うのか???否、違う。

少なくとも俺が教え込まれた物、想像していた物とは大きくかけ離れている。

もしかして『無の世界』なんて本当は無くて、ここは天国か地獄なのだろうか？

でもやっぱり何か違っている気がする。

無へ返されたなら、肉体だけではなく魂も無へ返される筈。

なのに俺には、体は動かないが自分の体を感じるし、思考だって今もこつしてある。

でも俺は確かに無の世界へ引きずり込まれ、確かに『消された』。

でも俺はこつして生きている。

何故生きているか？そうだな・・・、

結論から言つと・・・

俺は何かの力によって無の世界から引きずり上げられた。

そして今も尚俺の魂は『何かの力』によってどこかに流されている。何となくだが、この力は聖剣の物ではないだろうか？

根拠はない。だけどこの力が聖剣の物だと、魂で感じ取れた。

長年といっても二三余年の間という短い間だけど、一緒に命をかけて戦ってきた相棒だ。

アイツが何を考えて俺の肉体を連れて行ってるのかは分からない。

だけど俺は確かに、相棒に救われた気がした。

つたくよう。死に際というか消え際というか、嫌味言ってから死ぬ奴を何故助ける必要があるのかねえ。

.....。

多分というか一応というか、この状況には辛うじてついてこられていると思う。

だが次、目に映る物が何か常識を逸している物だったとしたら、いい加減俺の思考はパンクするだろう。

ぶっちゃけもうパンク寸前だ。

魂やら無の世界やら、今の状況が確かに確認できない以上、勝手に妄想する事しか俺にはできん。

目が開けられるようになった時、何が映りこんでくるのかも分かりはしない。

だからせめて、どんな物が映りこんで来ても驚かない覚悟だけはしておこう。

――

――

――

――

――

・・・足が地面につくって事は、どうやら目的地に着いたようだな。

聖剣の力はもう感じ取れない。

ならば奴の企みは成功したようだ。

・・・これでも勇者様だ。

ドラゴンやらゴブリンやら、化け物相手に戦いまくった勇者様だ。

さあ、こい。

どんな物でも驚かない不動の精神を突き通してやろう。

勇者様の肝っ玉、しかと見せてやろう。

目に感覚が戻っている。

もう、目は開けられる筈。

何が映りこんでいても、不動の態度を貫いてやろう。

ゆっくりとだが、目を動かす。

ゆっくりとだが、視界が映りこんでくる。

目に映ったのは視界一杯の緑。

周りを見渡す限りここはどうやらジャングルか森林か。

木々から差し込む光で夜でない事だけは分かった。

ただどーっただけ言わせてくれ？

「妙に寒いんだけど？」

何だか肌寒い。

何も着付けてないなこりゃ。

んじゃ俺裸か。

どうしたもんか。

でもあれ？

何かがおかしい。

いつも下半身にぶら下がっているであろう俺のドラゴンの存在を感じとれん。

変わりに胸辺りに妙な重さを二つ感じる。

・・・え、胸に重さ???

視線を胸に。だがすぐに俺は後悔する事になる。

「・・・でけえな」

そんな客観的な感想をのたまわる事で現実逃避。

もしもこれが聖剣の仕業だったとしたら、どっかの川に投げ捨ててやろう。

そう心に誓いながらも視線をさらに下の方へ。

・・・俺は世界を呪った。

流されるがままに（後書き）

タイトルどおり、性転換物です（―――）

勇者から露出狂に

ここは何処だ。

どうして体が女になっている。

そしてどうして・・・全裸なのだ。

と、とにかく、頭を整理してみよう。

こういった予測不能な事態に陥ったのは、初めてじゃないしな。

よし。ではまず、どうして俺が生きているのかを推測しよう。

俺は確かに、あの時無に返された。

だが何らかの力によって命を救われ、今ここに立っている。

とりあえず聖剣の仕業にしておくとして・・・。

次は何故、全裸なのかだ。

『転移』系の魔法でなら、身に纏っている衣服と共に移動できる。

だが『空間転移』系の魔法は、その生命自体しか移動出来ない。

ようするに全裸にならないと空間移動できないって事だ。

となると俺は『空間転移』系の力によって何処か知らない場所へ飛ばされた・・・、でいいのかな？

それなら俺が全裸なのも頷けるし、この状況も理解できる。

それとも、或いは無の世界で着ていた服を塵にされたのか・・・。

では、何故俺は生きているのか・・・？

・・・まあ置いといて。

じゃあ最後の推測だ。

何で俺の体が女になっている。

これが今俺にとっての最大で、最も重要な要素だ。

何処へ飛ばされたとか、何で全裸なのかとか、そんな事ちっぽけに思えてしまう程の要素だ。

肉体が女になってしまう事態、事例なんて聞いた事もないし、知りたくも無いわ。

でも現に俺の体は女になってしまった。

これは何らかの力によって肉体を改変させられた、と見ていいだろう。

その『何らかの力』は聖剣の力と見ていいだろう。

ここへ飛ばしたのも聖剣の仕業と見ていいだろう。

女に姿を変えたのも聖剣の仕業と見ていいだろう。

・・・川なんて生易しい、今度会ったら海に沈めてやる。

そつ心に決めながら、客観的に自分の現状を考えてみる。

『森の中で全裸の女性が頭を抱えて座り込むの図』

・・・これちょっとヤバイんじゃないか？

例えば、ここがどこかの田舎の村の近くだったとしよう。

例えば、村の爺さんか婆さん、或いは子供が芝刈りにきたとしよう。

そこで出くわすは全裸の女性コト変態露出狂。

・・・考えたくもない絵図だな・・・。

そんな事が現実起これば、俺の羞恥心が爆発して口から嘔吐を吐き出しながら気絶する事だろう。

。 ってか、何で俺はこんな壊滅的な思考をしているんだろうかね・・・。

体が女になったせいで、ネガティブにでもなってるのか。

落ち込んでる暇があるなら少しでも現状を改善させる為に行動すればいい物を。

でも、それも仕方ない気がする。

森で遭難した経験はあるが、全裸で放り込まれた経験はない。

武器も食料もない。

そんな状況でどうやれば、ポジティブな考えが浮かぶのだろうか。

でも落ち込んでるだけじゃあ、現状は何も変わらない。

という訳で、行動に移すことにする。

――

――

――

――

――

今の所、人の気配は感じ取れないが、近くに村里か集落があるかもしれない。

そこで山賊に身包み剥がされたとか、適当に誤魔化して服でも何でも体を隠せる物を分けて貰えばいい。

そしてあわよくば、食料を分けて貰えばいい。

そんな淡い期待を抱きながら歩を進めていると・・・。

ある程度歩いた先に洞窟っぽい祠を発見。

何か良からぬ気配を感じるが、人かもしれないので覗く事にする。

気配を殺し、中を覗くも……。

……っ!!

な、何だ、あの良さげなローブは?!

茶色くて分厚そうなローブが、奥の方に落ちていた。

だが、奥の方から良からぬ気配を感じる。

でも、暗がりのせいでよく見えん。

しかし、あれさえ手に入れば、こんな肌寒い格好からもおさらば出来る!

目を光らせながら洞窟の奥へ足を進め、ローブに手をかける。

勇者は『良さ気なローブ』を手に入れた。

王道RPGに良くある効果音を奏でながらも、同時に横にいる物体の正体に気づく。

凄く……毛深いです。

その正体は、ワーウルフと呼ばれる狼の、数倍の大きさはあるだろうモンスター。

よく見ればそこらじゅうに、奴の餌食になったであろう骸骨が散らばっている。

恐らく、このロープも彼らの物だろう。

有難く頂戴し、俊足に、かつ無音で素早く洞窟から外へ抜け出す。

それと同時に、巨大狼も洞窟から飛び出してきた。

目を赤く光らせ、口からは涎が溢れんばかりに流れ出ている。

どうやら俺を食つつもりのようだ。

戦いたいのは山々だが、こんな全裸で武器もない状態で戦えというのは、些か鬼畜すぎやしないだろうか？

せめて武器らしい武器が欲しかった・・・。

当ても無く森の中を駆け抜け、それに食らいつくように巨大狼が追いかけてくる。

走りながらも器用に素早く、手に入れたロープを羽織る。

うん、少しは寒さに耐えられる作りをしているな！

ああでも、くそ！

コイツを食料にすれば万事OKなのだが、武器がないから逃げるしかない！

素手で戦うという手段もあるが、そんなの無理に決まってるだろう？！

でも思ったより足の速度は速く、どんどん狼との距離を切り離していく。

女になったお陰で身軽にでもなったのだろうか？

少しだけ女になった事に感謝しつつも、みるみる速度を上げていく。

これならあの狼も撒けるだろう。

あの狼も俺の逃げ足に諦めたのか、追うのをやめたようだ。

ふ、思い知ったか、獣の分際で！

そう思った瞬間、足が地面に着かなかった。

前言撤回。

獣は俺よりもよっぽど賢かったようだ。

狼に気を取られていたせいで、目前に広がる谷に気づけなかった。

崖の下には川があり、その川に一直線に落ちてしまった。

這い上がるうにも、落ちた衝撃が強すぎて体が言う事を利かない。

自分の馬鹿さ加減を呪いながら、底の見えない闇へ溺れていく。

こんなマヌケな死に方（溺死）するくらいならやっぱり、勇者らしく魔王と相打ってれば良かったと心底思ったユルカであった。

露出狂から遭難者に

・・・意識が戻った頃には既に、闇が辺りを占領していた。

もうすっかり日も沈んでいる。一体どれだけ下流に流された？

けど、生きている。それだけでも運がいい方だろう。

水に沈んでいた体を無理矢理起こし、岸に手をかけ、川から抜け出す。

あーあ、せつかく拾ったロープもびっちゃんこじゃねえか。

これなら、全裸の方がまだマシかもな・・・。

『良さげなロープ』を脱ぎ捨て、再び全裸になる。

昼は『肌寒い』程度にしか感じていなかったが、夜の寒さはそれを遥かに凌駕していた。

それと相まって全裸でビツチャンコとなると、その寒さは凌駕していたそれをも凌駕していた・・・。

要するに極寒並みの寒さって事だ。

寒い通り越して熱いと感じるぐらいだから、相当ヤバイかもしれん。白く健康そうな女の肌も、青白くなりつつある。

だが・・・、周りを見渡す限りやっぱり、視界には緑しか映らない。

・・・とにかく、この寒さを凌ぐ為の寝床を探さなくちゃいけない。

幸いにも服は手に入れた。あとは寝床と食料だけ・・・。

いや、食料は問題ないだろう。

辺りに落ちている木の枝をかけ集める。

・・・よし、これぐらいでいいだろう。

こういう場面に陥った時の事も考え、不得意な魔術を覚えておいてやはり正解だったな。

『フレイム』

初級魔法・フレイムを指先から発動し、木の枝に点火させる。

瞬く間に枝から枝へと燃え移り、焚き火を作った。

・・・これである程度寒さは凌げるな。

濡れきつたロープを焚き火のそばで広げる。明日には乾くかな？

まあ魔法といっても、俺には一般的で常識的な物しか使えない。

こういう非常時の為にしか使う必要がないとも言える。

なんせ俺には聖剣があったし、何よりチンタラ詠唱するよか真つ先に剣で切り付けた方が、魔物相手には効率が良かったからだ。

その剣が聖剣ともなると、どんな魔物でも一撃で粉碎できたりできなかったり・・・。

だから勇者と呼ばれる俺も、聖剣に頼らないとただの人である事に違いは無い。

ただ少しばかり、武術に心得があるだけ。

ただ少しばかり、常人には出来ない事が出来るだけ・・・。

常人には出来ない事。

例えば、こんな事だ・・・。

川の流れに佇む、小さいが少しばかり大きめな石に体の重心を乗せる。

小石の上を片足で立ち、深呼吸。

この状態から少しばかり手を伸ばせば、すぐに水に接触できる。

俺の取り得と言えはこんな事しかない。

指一本と動かさず、足に着いている石と同化する事で、自然に溶け込む。

頭は思考で一杯。

これから、この先どうすればいいのかわかなくて頭が一杯。

こんな何処かも分からない場所に放り込んだ聖剣を、どうしてくれるかわかなくて頭が一杯。

それでも、体は指一本と動かさない。

近くにはいるが、未だ一瞬で手が届く先にはきていない。

だから、未だ体は動かさない。

少しでも波を立てれば、彼らは一瞬で散って行ってしまっから……。

だから、体をうごかさ・・・きた。

無音で波を立てずに、瞬間的に手を水の中へ突っ込む。

掴んだ先には、この川で生活していたであろう生物。

掴んだ生物を焚き火の方へ投げ飛ばす。

悪いが、今日の晩飯になってもらう。

同時に、近くにきていた魚達を片手で突っ撥ね、焚き火の方へ弾き飛ばす。

逃げ纏う魚達の逃げ道を片手で断ち、もう片方の手で新たに彼らを突っ撥ねる。

その作業を1分程続けた所、数十匹にはなったであろう魚達が焚き火の傍で跳ね回っていた。

よし、これくらいでいいだろう。

その辺に落ちていた、串になりそうな形をした石を拾い集め、彼らの頭からぶっさす。

彼らを焚き火で炙りながら、寝床はどこにしようか、辺りを見回してみたところ・・・。

・・・あの木なんて良さげなんじゃないか？

火で炙った魚を口にしながら、目をつけた木に歩み寄る。

周りの木よか、少しばかり大きいだろうな大木。

その頂上には、人が乗っても折れなさそうな、しっかりとした太い枝が生えている。

試しに足で跳躍してみた所・・・うん。

以前のような跳躍力は無いが、これならあの枝までわざわざ登らなくても、飛べば手が届くだろう。

一気に跳躍し、枝に手をかける。

・・・よし。思ったよりも頑丈な枝なようだ。

寒さも他の枝から生えている葉っぱが周りを覆いつくしてるから、ある程度は凌げると思う。

これで乾いたロープを体に包めば、この寒さも難なくやり過ごせるだろう。

たとえ野生の動物が襲ってきたとしても、木の上にいるからそうそ
うな事がない限り危険はないし。

それに、何らかの危険が迫れば、瞬時に目が覚めるだろうし。

ただ、俺の寝相で木から転げ落ちなければの話だが・・・。

まあ、その前に獲った魚さんを有難く頂戴するとするか。

木から飛び降り、再び野生の食事を再開する。

これからどうなる事やら。

露出狂から遭難者に（後書き）

文才なんて・・・文才なんて・・・ウワァァァァァン!!!

行く手を阻む崖野郎

日が昇ると同時に起床し、朝食用に取っておいた果実を貪りながら、木から飛び降りる。

この森でサバイバルな生活を繰り広げる事、早三日。

最初は川を辿れば自然と森から抜けられると高を括っていたが、どうやら事はそう簡単に済みそうもないらしい。

下流へ進めば、海が広がり。

上流へ進めば、崖が聳え立つ。

崖からは大量の水が激流となり、滝となり湖に流れ落ちていた。

こんな激流に飲まれてよく生きていたなと感心しながら、初日は泣く泣く元の場所へ戻る羽目となった。

森で生活する事、早三日。

寝床も滝の傍に移し変え、食料も魚と果実があるから飢える心配もない。

生きる為に必要な、最低限の要素は全て揃っている。

後は、この森から脱出するだけ。

でも、それが出来ないから、困っているのだ。

森を抜けられたかと思うと、海が目前に広がっていて。

どうやら、俺が今いる場所はこの崖を除き、全ての森を海が周りを囲っているようだ。

残すはこの、頂上が見えそうで見えない程の高さを誇る、崖野郎のみ。

こいつを越さない限り、俺はこの森から脱する事が出来そうもないらしい。

なので、一度意地でも登ろうと、ロッククライミングに挑戦してみたが、半分と行けず力尽き落下。

幸いにも足を強打するだけで済んだが、もう一度やれば骨折くらいはいくと思う。

でも、その時……、初めて体の異変に気づいた……。

腕力が、握力が、全くと言っていいほど出せなかった。

以前は片手で林檎を握り潰すぐらいはあったのに、今は両手で必死になって、やっとこさ握り潰せる程度。

いや、一般人の腕力が、それ以上の腕力はあるとは思う。

それでも、崖をよじ登るだけの筋肉が、この腕には全くと言っていいほど無かった。

それだけではない。

この体になってから得た身軽さは素直に評価してもいいけれど、短時間走るだけですぐに息を切らしてしまう、この体たらくは何だ？！

いや、以前と比べれば走る速度も増したし、跳躍力もこんな非力な体でよく出せていると思う。

それでも、勇者としての観点から見れば、この肉体は脆弱と言っていいほど脆いと言える。

川の近くに歩み寄り、改めて自分の顔を拝見する。

水面に映るのは、赤い髪をした、目つきの悪い女。

俺と瓜二つな髪をもつ、女。

そもそも、どうして俺の体は、女になってしまった？

男を女に変える魔術なんて聞いた事もない。

聖剣がやったにしても、一体どうやって性別なんて変えたんだ。

いや、そもそも、この体は果たして俺の物なんだろうか？

もしかしたら、どこの誰かも分からない『誰か』の器に入れられているのかもしれない。

そうならば、この女性には飛んだ迷惑をかけている事になる。

でも、俺もどうしてこんな事になったのか、全く検討がつかないんだ。

無の世界に返されたと思いきや、目が覚めればどこかも分からない樹海の中。

不運にも巨大狼に追い回され、愚かにも足をすべらせ、川に落ちる始末。

後ろには海が広がり、前方には崖が聳え立つ。

八方塞とはこの事か？

・・・とにかく、今はこの状況下で、何が出来るかだ。

崖を登るにしても、ある程度の筋力と持久力が必要だ。

ならば簡単な話、鍛えればいいのである。

だが、鍛えるにしても、崖をよじ登るだけの筋力を身につけるには、相当な時間が要するだろう。

ならば、イカダを作って海へ繰り出すとか？

アホか、そんな現実味のない手段がとれるか。

即遭難して、鮫にでも食われるのがオチだ。

ならば、なんだ。

やはりこの崖を意地でもよじ登るしかないのか。

ハア・・・。

今もこうして全裸になって、座禅しながら滝にうたれてる訳だが・・・。

何？風邪引くって？

ハハハ、そいつは残念。

俺は今の今まで『風邪』とやらにかかった事がないのだ。

どうだ、羨ましいだろう？！

フハハハハ、ハハハ、ハア……。

……とりあえず、鍛えるか。

腹筋＋腕立てを100セットぐらいやれば、ある程度の筋力もつくだろう。

よし、これからの方針は決まった。

とりあえず、死に物狂いで鍛える事にする。

それで、少しの間を置いてから、改めて崖を登る事にする。

たとえ登れたとしても、その先に何かあるのかも分からない。

もしかしたら、巨大狼のような化け物が、ウジャウジャいるのかも
しれないし。

でももしかしたら、呆気なく人里に着けるのかもしれない。

でもその前にはまず、目の前に佇む崖野郎を越えなければいけない
わけで……。

その為にはまず、鍛えなければいけない訳で……。

「ええい、考えても仕方ない！今は我武者羅になって、筋力を鍛える事にする！！」

こんな非力な腕では、お得意の剣術も使えないだろうし。

でも腕力を手に入れられれば、それも可能だろうし。

同時に、持久力も手に入れられるだろうし。

戦闘力が上がれば、死ぬ確立も減るだろうし。

強くなっても、損する事はないだろうし。

女になった原因も、それから探しても遅くはないだろうし。

聖剣に制裁を加えるのは、それからでも遅くはないだろうし。

座禅を解き、滝から立ち上がる。

同時に揺れ動く二つの物体。

ああ、そうだ。

鍛える前に一つだけ・・・。

「この馬鹿でかい脂肪を何とかしてくれ」

遭難者から原始人に

まるで原始人のような生活を始める事、早二ヶ月。

朝一は持久力をつける為に、海沿いの海岸を往復。

脚のバネや独自の腰の角度などを追求し、わざと疲れやすい走り方をさせる。

尚且つそれなりの速度で走っているから、かなり消耗するのは当たり前前。

でもこれを毎日繰り返していれば、脚の筋肉もつくし、何より持久力が得られる。

まあ最初は、足を動かす度に揺れる二つの脂肪が超絶に鬱陶しかったが、もう慣れたわ。

昼になる前に滝に戻り、果実と魚サン達を貪りまくる。

ガツガツ食うから、傍目から見れば相当下品だろうけど、そんな事はどうでもいいのだ。

食えりゃいいのだ。

腹が満たされれば、それでいいのだ。

偉い貴族さんとかが見れば下品だの、汚いだの、散々に言われまくるだろうけど、そんなのは勝手に言わせておけばいい。

というか第一、釣った魚を焼いて食うのに上品さなどいらんわボケ。

偉い人にはそれが分からんのだ。（経験あり）

それに、俺には今日のスケジュールが山積みなのだ。

飯ごときに時間をさいている暇などない!!

これから腕立て500回と、腹筋300回。

それを1時間でこなせたならば、褒美として10分間休憩。

それが出来なければ、罰として逆立ちしながら森一周。

夕飯時には再び魚達を食い漁る。

食い終えた後は、滝で20分間座禅をしつつ精神統一。

もちろん、全裸でな。

・・・最近、全裸でいる事が当たり前のように化してきたのが悩みである。

でももはや、日課と化してるからどーしようもない。

日が沈む前に、正拳突きを木に500回、回し蹴り300回をあてまくる。

俺は元々剣術主体で戦うのだが、肝心の剣がないからやりようが無いのだ。

いや、最初の頃は木の棒などで素振り300回とかやってたけど、感覚がおかしくなりそうだったから即止めた。

何故か？それは、形の曖昧な木の棒などを毎日振ると、元々あった型などが崩れる恐れがあったからだ。

まあ、その程度で型が崩れたりはいらないとは思うが、一度考え始めれば頭から離れなくなり、結局今は剣を忘れて我武者羅に無手の修行を繰り返している。

当初の目的は腕力と持久力を得る事だけだし、単純な腕力を手に入れるだけなら、素振りよかそうだった修行の方がよっぽど効率がいいと言える。

超ハードな修行を始める事、早二ヶ月。

少々ぶっ飛ばしすぎな気もするが、これぐらいしないと崖野郎を超えられそうにないから丁度いい。

確かに、最初の頃は海岸一周するだけでもヒューヒュー言っていたが、最近では息切れせずに完走できたりするから上出来である。

努力したかいがあったと言える。

そろそろあの崖野郎を越える時も近づいてきたようだ。

残り、後一ヶ月。

当初の目的は三ヶ月以内に腕力をつける事だったから、当初の目的通り後一ヶ月続けるつもりである。

でも、もう既に十二分すぎるくらいに筋肉もくっついてきた。

筋肉といっても、ムキムキという訳ではない。

筋肉をつけ過ぎれば体重が増え、移動速度が貧しく低下する恐れがあったから、俺独自の鍛え方をさせてもらった。

簡単に言えば『凝縮』させるのだ。

一見ただの細腕のようにしか見えないが、実は最も必要な筋組織しか加えられていないという、少々ぶっ飛んだ構造をしている。

これで恐れていた体重の増加も防げるし、以前の速度よりも遙かに

速い速度も叩き出せている。

・・・え？どんな鍛え方すればそんな構造になるかって？

・・・それは、あれだ。禁則事項です。

俺も一武術家だ。

わざわざ秘密を暴露する必要がどこにあるんだ。

っていうか、俺は誰に話しかけているんだ。

ついに一人で暮らす生活に寂しさでも抱き始めたか。

・・・アホらしい。

そんな事は、断じてあり得ない！！（汗）

寂しいなんて、そんな訳ないんだからね！！（汗）

そんなこんなで後一ヶ月。

今日も日が昇ると同時に起床し、取って置いた果実を胃袋の中に収める。

うん、いい天気である。こんな日は走りこみに限る。

海岸に向けて朝っぱらから全速力で飛ばし、縦横無尽に森の中を駆け抜ける。

今日は少し力を入れて、海岸十週でもやってみようか？

そんな無茶なプランを頭の中で練りながら、いつも通りに道を駆けていると……。

突然、今までいる筈がない、感じた事のない気配を、感じ取った。

「……っ?!!!」

全速で動かしていた体を即座に停止させ、姿勢を低くし、気配を最小限に収める。

……何だ……？

今、森のどこかで、未知数の気配が現れた。

この森には野生の動物はリスやウサギなどしか生息していないし、危険と言える生物は勿論皆無だ。

ああ、言い忘れていたが、彼らにも時たまその命を頂戴させてもらっている。

毎日毎日ハードな修行を繰り返している訳だから、その分消耗するスタミナの量も半端ない訳で。

その分栄養が必要な訳だから、魚だけではなく『肉』も胃袋に入れさせてもらっている。

まあ何が言いたいのかというと、この二ヶ月間で完全に森に溶け込み、自然に溶け込んでいた原始人コト俺。

もはやこの森は俺の庭と化してきていたから、当然辺りに変化が現れれば、すぐに気づける訳で。

・・・本当に、突然現れた気配。

未知数の気配。不確定な気配。

どこだ、どこにいる。

意識を周りに浸透させ、神経を、五感を最大限に研ぎ澄まさせる。

分かった事は、この気配はリスやウサギ、ましてや狐の物でもないという事。

この二ヶ月間の間で感じた事のない気配……。

……まさか、人間……人間か？！

気配を察知した方向へ音を立てずに忍び寄り、それとは相まって結構な速さで森の中を移動する。

数分という時間をかけて、その正体のいる場所へ到達した。

……その正体は、黒い髪をした男の子だった。

大体、12、3歳ぐらいだろうか？

木の陰に隠れ……いや、死角となる陰に潜みながら、その正体をじっくり観察する。

顔は、大人しそうな、幼い顔つき。

服は、貴族が着そうな、高級そうな洋服。

でも、俺がいた世界の服とは、どこかかけ離れている物。

だがどこと無く、女が着そうな洋服である事も分かる。

・・・最近の若者は、女っぽい服を着るのが流行なのだろうか。

・・・最近の若いもんの考えは、ホトホト分からんなあ・・・。

・・・いや、何を阿呆な思考を練っているんだろっね俺は。

今は、そんな事は、どうでもいいだろうが。

肝心なのは、

一体どうやって、気配を感じさせずに、ここまで移動したのか。

一体どうやって、俺の視野を掻い潜って、ここまで移動できたのか。

『転移』系の魔法という可能性もあるが、こつも気配を感じさせずに一瞬で間合いに入ってこれるような、都合のいい魔法は存在していなかった筈。

そんな物があつたなら、一国の王や、偉いさん達は暗殺されまくりだろうな。

・・・ならば、もう一つの可能性・・・。

『空間転移』系の魔法は、そこに存在する物体を次元ごと転移させる、言わば転移の力を数百倍超える、最上級の魔法でもある。

それならば気取られずにここまで一瞬で来れたのも、納得が曖昧で

はあるがつくし、俺も恐らくそれらの力によってここに連れて来られたのだろう。

そんな無駄な思考を頭の中で繰り広げながらも、男の子の一挙一動を観察する事は止めない。

見た感じ肌も髪も清潔そうだし、貴族であることは間違いないだろう。

でもそんな裕福な貴族様が、最上級である空間転移を使えるとは到底思えない。

ならば第三者がこの子をここへ送り込んできた・・・という事ではないのだろうか？

しかし、もしそうだとしたら、第三者は『最上級』の魔術師、という事になる。

空間転移系の魔法を使える者は、俺の知る限りでは、指の数程にしか存在していなかった筈だし・・・。

どいつもこいつも気の良い奴らだったから、こんな幼い少年を、こんな何処かも分からない樹海の中に放り込むなんてのは、まずない話である。

・・・分かっているさ、こんな思考が無駄である事ぐらい。

でもここで下手に行動に移せば、敵対して質問に応じてくれない可能性があるので。

恐らく、この子はこの世界の住人だろうし、どうやって敵では無いことを示せばいいのか、今考え中なのである。

それにしても・・・、あれ・・・？

今更ながらに気づいたが、様子がおかしい。

いや、様子がおかしいという以前に、まるで動いていないのだ。

歩を一步も動かしておらず、表情は氷のように固まっている。

一体、何者なんだろうか、この少年は。

こんな幼い子が魔術師・・・なのだろうか。

やはり、危険とは言え、こちらから仕掛けるべきだろうな。

もう結構な時間が過ぎているが、一向に少年の動作が見られないし、存在するのかわからないのかさえ分からない、第三者の存在も曖昧ではあるし。

もう観察するのにも飽きてきたし、危険もなさげに見えてきた。

もう無駄な観察はヤメだヤメ。

人間には言語という意思疎通が可能な素晴らしい物が存在するだろう。

・・・あれ、ちょっとまってよ・・・？

言葉が通じなかったりしたら泣くぞ俺？

そんな、言葉が通じないとか、十分にあり得る話である。

でもそれは、この世界が俺の予測通り違っていたらの話であって、ここがもし別世界でないのなら、それも気鬱に終わるだろう。

でももし、世界が違っていているのなら、言葉が通じる訳もない。

・・・もういい加減考えるのにも疲れてきたし、隠れて観察するのもやめにしようか。

言語が通じる通じないの話は、実際に試してみれば分かる事だろう。

敵対していないと証明するには、行動で示せばいい訳だし。

隠れていた茂みから一気に飛び出し、少年の前に現れる。

さて、未だ少年の方は無反応ではあるが、俺は逆に目を輝かせている。

久々に会えた『人』だ。

二ヶ月と言う長いとはいえ、短い期間を森の中で一人で生き抜いてきた。

そんな俺にとって人に会えた事の喜びは、予想に反して結構な感動を覚えさせている。

さて、ではここはシンプルに初対面の方には誰しもが言い放つ、古典的な挨拶をするとするか。

しかし、言葉を紡ごうとした瞬間、絶叫が鳴り響いた。

「……………おおおお？！……！！」

……あ、そういえば全裸だった事を忘れていた。

七瀬 奈緒？

私の名前は七瀬 奈緒、どこにでもいる普通の女子高生です。

苗字と名前に『な』の字が3つもある事から、友達によく「ななな」とか訳の分からない愛称を付けられたのは今でも根にもっている。

私の名前は七瀬 奈緒、一般的な女子高生です。

平均的な女子の身長を下回る、チビで童顔で小学生にしか見えない容姿だけれど。

私の名前は七瀬 奈緒、庶民的な女子高生です。

特に秀でた才能もない。強いて言うなら成績が平均より少し上くらいな程度。

私の名前は七瀬 奈緒……。

私の名前は七瀬 奈緒……。

私の名前は……

――

――

――

――

――

「お……おーい？大丈夫か……？」

少年が突然、大音量の奇声というか、絶叫を上げた後ぶっ倒れてしまった。

すぐに駆け寄り、安否を確かめる為に声を掛けたり体を揺るすも、返事は返ってこなかった。

色々聞きたい事は山ほどあるのだが、この分では暫くの間、目を覚まさないだろうな……。

気絶している少年の前で胡坐をかき、考えに耽る。

……無表情で固まっていたかと思いきや、声を掛けようとした瞬間奇声をあげて倒れたと……。

……全くもって意味分からんが、もつと意味分からんのは少年が発したセリフである。

「……此処は何処だ……か」

此処は何処・・・という事は、この少年は望んでここへきた訳ではないという事か。

まあ、当然と言えば当然か。

こんな樹海の中に何の目的も無くおめおめ来るような奴は、何処を探してもいないだろうから。

ならば・・・、事故か何かに巻き込まれた可能性が高いか・・・。

改めて少年の姿を観察し、再び考えにふけ始める。

少女のような容姿をしておきながら、実は男の子だと辛うじて分かる可愛らしい中性的な容姿。

しかし、服装がそれを台無しにしてる気がする。

太ももから脚を露出させる、恐らくは女物の服のような・・・。

そんな女物の服をどうして、この少年は着ているんだろうか。

・・・まさか、そっち系の趣味のお方だろうか？

・・・だとしたら、この少年は若いにも関わらず、随分と重い宿命を背負っている訳か・・・。

・・・まあ、俺の現状も似たような物だけだな（笑）

無駄な思考をサッサと取り止め、少年を片手で担ぎ、帰路を辿る。

少年の詳細は、直接聞けば分かる事だろう。

それに本当に重要なのは、この子じゃない。

本当に重要なのは、『此処が何処なのか』、だ。

この少年が誰なのかとかは、この際どうでもいい。

俺はいち早く、この世界が違っているのかが知りたいんだ……。

「なあ、少年……。ここは一体……。何処なんだ？」

気絶している少年に向かって、最も聞きたい情報を口に出した。

当然、返答は返ってくる訳も無く、静寂が森の中を包んだ。

2ヶ月ぶりの会話

「つまり・・・君は『日本』とやらの国が出身で、貴族ではなく平民。そして、目が覚めたらここにいた、と・・・。それであつてるか、少年？」

「は、はあ・・・」

・・・どうしてこうなった。

どうして、私は現在進行形でめっさ美人な女の人（？）に森（？）で質問攻めにあつてるのよ。

貴族とか平民とか・・・このひと本格的に頭がおかしい人だよ、うん。

だって髪の毛赤いよ。これ絶対染めてるよね、趣味悪いな。

しかも何？今この人、私のこと『少年』とかほざきやがったよ。

幼女は言われても少年は言われたことないな、うん。

でも、あれ・・・？

どうして私、こんな所にいるの？

昨日は確か、部活帰りでクタクタだったからパジャマにも着替えずにベッドで寝てしまったような・・・？

「……ほけている所悪いが、次の質問に移らせてもらっぞ?」

「あ、はい。どうぞ……?」

「当然、レディオドという大国は知っているな?」

「……いえ、知りません」

「……じゃあ、クーチラス皇国は?」

「……聞いた事ありません」

「……じゃ、じゃあ! テステイラント帝国は?!」

「……あの、病院に行かれた方がいいのでは」

……もう、この人の頭は手遅れだ。

手元に携帯があればすぐにでも救急車を呼びたいくらいだ。

まさか、これが俗に言う中二病って奴なのか。初めてみた。

「……では、最後に……。魔王という存在は、もちろん知って

いるな？」

・・・きゅ、救急車アアアアア！！！！

誰かああああここにヤバイ人がいるよおおおお？！

見た感じ私より少し上だと思うけど、そんないい年した女性が中二病？！

あー痛い、痛いよう・・・。

「・・・空想的な存在であるのは確かです」

「・・・把握」

ユルカ 視点

弱った・・・。

今の一言でこの子が別世界の人間である事が確定してしまった。

俺がいた世界では魔王とは、魔の象徴、悪魔の権化。

その名を聞けば、幼児でさえ畏怖を抱く存在なんだ。

いや、畏怖を抱かなくとも、嫌悪は抱いていい筈。

その筈が、この少年は無表情と言うか、白けきつた目で痛い人を見るかのように俺を見据えている。

・・・恐らく、この子の世界では魔王とは架空の存在なのだろう。

ならば、俺は滑稽と取れる質問をした訳だ。

少し恥ずかしさを抱きつつも、腰掛けていた石から立ち上がり、少年の前に立つ。

「自己紹介がまだだったな。俺の名はユルカ。一応、職業は勇者。こつ見えても元・男だ。君の名は？」

こんな事いきなり言われても混乱するだけとは思うが、一つ一つ言っただらキリがないので一度に全て言い切った。

「君の、名前は？」

催促を促すように名を聞き直すも、表情があの時同様硬直してしまっている。

まさか、またあの絶叫を至近距離からくらわなきゃならんのか。

しかし、幸いな事に返事は返ってきた。

怒気を込めて、だった。

「ふ、ふざけないでください・・・！まさか、誘拐ですか。こんな
いたいけな少女を拉致ったんですか？！しかも、重度の中二病とか
！！頭沸いてんですか？！病院行った方がいんじゃないですか？
！貴方、女性でしょう？！元・男とかふざけないでください！！そ
んなんじゃないあ、私みたいに彼氏なしがずっと続きますよ？！とつと
と現実に戻ってください！！そして、私をお家に帰してください！
！お願いしますからあ！！！！」

爆発したかのように少年の口から罵声の連打が飛び出した。

そう言い放った後に泣き出してしまうのだから、こちらもどう対処
しているのかアタフタアタフタ。

少年を宥めながらも、少年が言い放った言葉を頭の中で整理する。

誘拐だの中二病だのお家に帰してだの・・・。

中二病が何なのかはわからんが、一つだけ気がかりな発言があった。

まさか・・・な。

「なあ、一つ聞いていいか」

「グスッ……。なんですか？」

その質問の返答は、分かりきっていた。

だから、それは無意味だったのかもしれない。

でも、それでも、俺は聞かずにはいられなかった。

「少年……。もしかして、女か」

「そんなの、言わなくても分かるでしょう?! 女、ですよ!」

とにもかくにも、少年……。

いや、彼女は俺と同じ境遇に陥った、被害者である事が発覚した。

それが、死にぞこないの勇者と、平民の女の子……。おかしい組み合わせである。

続く。

2ヶ月ぶりの会話（後書き）

久々に更新と・・・。

お気に入り登録や感想を書いて下さった方、こんな駄文を読んで頂いて有難うございます。

不定期で更新していきませんが、恐らくスローペースになると思われます。

一応、ヒロイン登場です。まあ、性別逆ですけどね（笑）

しかし、こんなんで戦闘描写とか書けるのか・・・?!

今になって心配になってきました（笑）

では、またいつになるか分かりませんが、ノシ

勇者と少女と祝10話

…あれから彼女(?)に必死で説明を続けたが、誘拐だの拉致だのキリがなかったので、とりあえず既に日も沈んでいたので魚を取って見せ、目の前で焼いて食わせた。

焼いてる間もぐちぐちと文句を垂れていたが…。そこは省略させてもらおうか。

「あのですね…、何度言ったらわかるんですか？私は野宿はおるか直で魚も焼いたこともない。ただの一般人なんですよ？そんな少女に床で寝るとか、あなた本格的に頭おかしいですよ。脳みそ沸いてますよね。変態ですよ」

…勇者は呼ばれても変態はなかったな。ははは…。

「もういい、わかったからもう寝ろ。」

「…こんな寒い中で地べたで寝ると?!」

「だから、俺の今着てるローブを布団代わりにとさっきから…」だ
あああああ!!何勝手に脱ごうとしてるんですか?!変態!変態!

「はいはい。変態でも何でもいいから口の音量を下げてください。頼むから…。」

「仮にも女性でしょう?! そんな簡単に服を脱いじゃあ、そのうち本物の変態に襲われちゃいますよ?!」

「はいはい。肝に銘じときますよ。だから口の音量を下げ「わかってないです!」欠片も、微塵もわかってないです! いいですか?! 幾ら貴方が山に住む変態だとは言え、人前で簡単に服を脱ぐのはただの露出狂となんらかわりません! そんなんじゃあ折角の美人も台無しですよ?! 聞いてますか?!」

「はいはい。わかったからもう寝ろ。いい加減腹立ってきた」

「腹が立つのはこっちですよ!! 此処は何処ですか?! 貴方は誰ですか?! 私は誰ですか?!」

「此処か? 森だ。俺か? 変態だ。お前か? 一般人だ。万事解決だ。さあ寝ろ」

「なに投げやりな質問に投げやりな回答かましてんですか。万事解決? どころへんが解決したのか詳しく教えていただきたいですね!」

…ぶち。

「…強制的に眠らされなくなかったら今すぐ横になって目を瞑り羊を数える」

聞く耳もたんとする彼女の姿勢に、ついに堪忍袋がきれてしまった。

しかし、彼女はというと…。

「へえ?! それで現状は解決するんですか?! ふざけるのも大概にしてくださいよ露出狂の変態女!! だから、何度言わせれば気が済むんですか?! 私をお家にかえし《ドスツ》」

瞬時に背後に回り込み、手刀を彼女の首元に浴びせた。

手荒い方法はなるべく取りたくなかったが、幾ら説明したところで同じ事の繰り返しだった。

素敵なローブを脱ぎ、彼女の体に被せる。

風邪でも引かれたらたまったもんじゃないからな。

俺には医療の知識なんてないんだから。

――――

――

――

――

――

此処が何処なのかわからない以上、彼女を『日本』という国へ帰す方法はまず皆無に等しい。

いや、仮に正確な位置を把握できていたとしても、俺には転移は使えないし、この森一つ抜け出せない俺にどうしろと？

「…はあ…どうしたもんか…」

…正直、厄介なモノを抱え込んでしまったと思っている。

自己嫌悪に浸りつつも、これからの事を思うと頭が痛くなる。

俺一人でならどんな化け物が襲い掛かってきたとても自力で何とか出来る自信が多少なりともある。

だが、彼女を守り通せるだけの自信がない。

「しつかりしろ、それでも勇者か…」

望んでなつた訳ではないだろう？

人間、生きる為なら時に非情にならなければならない。

こんなお荷物抱えてやっていけると思うか？

「お荷物である事に違いは無いさ。でも、見捨てるなんて選択肢は最初からない」

無駄な思考をさっさと取りやめ、改めて少年の体を観察する。

…しかし、近くで見ると随分かわいらしい顔をしてるじゃないか。

先程までは言い知れぬ不安と怒りが混ざったような表情だったが、こうして寝顔を見てみると微笑ましい限りだ。

知り合いの女魔術師が好みそうな容姿をしている。美少年、ってやつか？

…中身は少女で、体は少年。

そんな特殊な病をもって生まれた人間もいると聞いたことがある。

だが彼女の場合、本気で自分のことを女だと認識しているようだ。

もしも俺も同じ境遇でなければ、もしも俺の体が男のままだったら、幾ら彼女が自身の事を女だと主張したとしても無視していた自信がある。

まあ今となっては信じるしかないんだがな。

舐め回すように少年の体を観察していき、骨格などは見るとやはり男の物だというのがわかる。

だが所詮これは俺の憶測でしかないし、実際に確認してみるのが手

っ取り早いか。

ふと思ったので手を徐々に彼女の股に近づけ…いやいやまで。

これをしてしまうと本物の変態になるぞ。

早まるな、まだそこまでして確認する必要は無いだろう。

自分自身で確かめないと気が済まない。俺の悪い癖だ。

しかし、今の現状を客観的に見てみれば

『全裸の女性が眠っている少年の体に触ろうとしてる図』、じゃないか…。

はは、うはははははは。

これじゃあ彼女の言う本物の変態と変わりないぞ。

あー、もう少しで変態になる所だった。危ない危ない。

俺も久々の会話で興奮していた部分もあったんだろう。

落ち着け、落ち着け。

こんなアホな思考してる場合じゃないだろ。

肝心なのは俺も彼女と同じ境遇という事だ。

目が覚めれば、という表現なら俺も同じだ。

俺自身も肉体が変換してしまった事に関しては疑問が尽きん。

何故俺の体、彼女の体は、性別が反転してしまった？

これをただの偶然、或いは事故だとは非常に考えにくい。

全部聖剣のせいにしていたがどうやら性別に関しては違っていら
しい。

まあここに飛ばしたのは聖剣に違いないから海には沈めなくとも川
には流してやるが。

「…はあ」

何度目か忘れた溜息をこぼし、目を瞑っている内に、いつの間にか
今日という一日が幕を閉じていた。

勇者と少女と祝10話（後書き）

記念すべき10話という事ですが、まず2ヶ月も放置にしてすみませんでした。

…それもこれも箱の野郎のせいなんです!!

僕は悪くな…あ、いえ。すみませんでした。

というか正直、もう続きが思い浮かびません。

いや、一応続きは考えてはいるんですが…。

例えば書いたとしても凄いg d g dになりそうなので、更新停止にさせてもらいます。

まあ所詮素人が書いた小説なんて駄文以外の何者でもないんですけどね。

改めて、こんな駄文に付き合ってくれて、ありがとう。でわでわ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0040m/>

勇者が前世な女剣士

2010年10月31日00時52分発行